

榊原 洋一
(Sakakihara Yoichi)



お茶の水女子大学教授

医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会副会長。専門は小児神経学、発達神経学特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。趣味は登山、音楽鑑賞。二男一女の父。

1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒。東京大学小児科講師を経て、現在お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授。

主な著書：「オムツをしたサル」（講談社）、「集中できない子どもたち」（小学館）、「多動性障害児」（講談社+α新書）、「アスペルガー症候群と学習障害」（講談社+α新書）、「ADHDの医学」（学研）、「はじめての育児百科」（小学館）、「Dr. サカキハラのアドHDの医学」（学研）、「子どもの脳の発達 臨界期・敏感期」（講談社+α新書）など。

小一プロブレムと発達障害

現在日本の教育界で「小一プロブレム」と呼ばれる事態が大きな問題となっている。伝統的に遊び活動を通じて、子どもの発達を促すという基本方針で育ってきた子どもが、時間と場所が厳密なスケジュールで管理され進行してゆく小学校の生活になじめない状態がこの「小一プロブレム」を引き起こしている。

人間は生まれたときから社会性を自然に身につける生得的な能力を持っている。乳児は、他人の顔や表情、動作あるいは発声に生まれつき敏感に反応する。人の脳には、対人関係を構築するための基本的なプログラムがあるのである。

保育園あるいは幼稚園の緩やかな規制から、小学校の規則正しい生活への移行は、今に限らず昔からあった。しかし、かつては「小一プロブレム」はなかったのである。生まれたばかりの乳児は昔も今も変わらない。そうすると「小一プロブレム」の原因として考えられるのは、幼児期の子どもの成育環境以外には考えられないことになる。

何が「小一プロブレム」を生じさせているのだろうか。ひとつのヒントになるのが、幼稚園や保育園における「気になる子どもたち」と呼ばれる一群の子どもたちの増加である。そして「気になる子どもたち」の一部が、発達障害とよばれる行動特徴を持つ子どもたちである。はっきりとした統計はないが、近年この発達障害の子どもたちも増えてきているといわれている。

「小一プロブレム」「気になる子どもたち」そして「発達障害」という3つのキーワードの関係について小児科医の立場から考えてみたい。